『叫び声』からみる在日朝鮮人像

――「小松川事件」と〈在日朝鮮人〉の表象をめぐって――

趙　美京

一　はじめに

『叫び声』（『群像』、一九六二年十一月）は、日本人「僕」がスラブ系のアメリカ人「セルベゾフ」やアメリカ黒人と日本系アメリカ人の混血児「虎」、そして朝鮮人の父と日本人の母の間に生まれた在日朝鮮人「呉鷹男（クレ）」（呉燦（オチャン））とともに経験した出来事を述懐する物語である。この作品では何よりも、多人種による共同生活や、その中における三人の登場人物の特異性が注目される。だが、発表当時には、平野謙が「いろんな道具立てのつづり合わせ」、すなわち「小松川の高校生殺しを大江の立場から見直し」[1]たという側面から論じるにとどまっており、一般には、「セックスの過剰のゆがんだ作品」とか、「閉塞の時代における脱出不可能性の証明のための、トラジ・コミックなメルヘン」[2]的な作品だと評価された。

この作品が執筆された背景を考える場合、大江が一九六〇年代日米安保闘争という状況の緊迫する社会の中で、条約改訂阻止のために、進歩的な文化人を中心とする〈安保批判会〉や石原慎太郎・江藤淳を初めとする新進の作家・演出家による〈若い日本の会〉など、政治的な意志を表明する団体に参加して活動する軌跡に注目しなければならないことはいうまでもあるまい。またその一方では、一九六〇年六月に、大江は野間宏や開高健とともに中国を旅行し、またその次の年には、東欧、西欧、ソヴィエトなどを旅行するが、このような海外旅行でたどった足跡、すなわちその具体的地域や風景などがそのままこの作品に描かれていることも指摘することができる。特に、旅行先で出会った様々な民族・人種の人々が、この作品に登場しているため、日本人による多人種・多民族の表象という面からも興味深い。

だが、この作品内の出来事の背景と関連して、何よりも注目されることは、一九五八年に起こった小松川の女高校生殺人事件犯人の在日朝鮮人、李珍宇（イジウ）を直接モデル化しているという事実である。小松川の女高校生殺し事件は、その当時、犯人の大胆な行動、たとえば新聞社や警察に自分の犯行を知らせる電話をかけていることや、動機なき犯罪ということなど、とにかく社会を騒がせた事件であった。本作品に関する先行論でも、この作品にモデル化されている李珍宇事件に関する言及はあるものの、その議論の中心は、中村泰行が指摘するような「実存的な人間のあり方」[3]とか、秋山駿が主張する「文学における性と犯罪の問題」[4]などという論調が主流であった。近年の石原千秋は、「人種的に差別される側の人間の問題」[5]を取り扱ってはいても、実事件と照らし合わせた「在日朝鮮人」の問題を、その論の中心に位置づけてはいない。

そこで本稿では、実際に日本社会に共生する在日朝鮮人像が、この作品『叫び声』でどのように表象されているのかに焦点を当て、虚構の世界で再構築された在日朝鮮人像のありかたを考察することにする。特に、その殺人事件の要因に関する当時の一般的な考え方と、当時の大江の認識および作品『叫び声』における捉え方を照らし合わせることによって、その在日朝鮮人像の表象がどのように変容しているのかを追究してゆく。

二　モデル李珍宇と物語世界の呉鷹男

この作品は「小松川女高生殺し事件」（一九五八年八月十七日）の犯人である在日朝鮮人、李珍宇少年をモデルとしていることはすでに言及した。この李珍宇事件は当時社会を騒がせ、新聞をはじめとするメディアが連日この事件を大きく取り上げ、多くの分野から反響を呼んだ。その反響は、大江の『叫び声』ばかりではなく、秋山駿、金石範、大岡昇平、木下順二、白坂依志夫がこの事件を対象に、エッセイや作品を書いたことからもわかるように、文学界にも及んでいる。[6]

本稿が大江の小説作品を考察するに当たって、遠回りながらも、猟奇的ともいえるこの事件の直後、犯人「李珍宇」の人物像や殺人事件そのものをめぐっての、社会の関心を明らかにすることによって、当時この事件が世間の関心をそれほどまでに惹くこととなった背景を考察することから始めたい。このような方法論は、その事件に対する当時のメディアの捉え方を媒介にして、大江の物語世界において、それがどのように変容したかを比較検討することを可能にし、『叫び声』における「呉燦（オチャン）」といった在日朝鮮人像の在り方を明らかにする上で有効だろうと考えるからである。

小松川の女高生殺し事件が起こってほぼ半月後、李珍宇が事件の犯人として逮捕されるのだが、この事件は、一九五八年九月一日付夕刊『毎日新聞』を始めとして、さまざまなマスメディアが次々と報道していった。犯人李珍宇に関する当時ののマスメディアの記事の一般的論調は次のようなものであった。

「二重人格の「金子」・女高生殺しの犯人」
――貧しさに強い反抗心、表面は親孝行＝秀才の空想家、ノンダクレの父に悲観

小松川女高生殺しの犯人金子鎮宇（しずお）こと李珍宇（一八）は同じ学校の在校生だった。中学時代は生徒会委員長を勤めた秀才、去る七月までいた勤め先でもまじめで近所でも評判の親孝行もの――だから捕ったときみんなが驚いた。本のムシで女人つきあいもないこの孤独なハイ・ティンがなぜ女の学友を殺したのか。なみはずれて家庭が貧しいため満たされぬかずかずの欲望。かつて犯した盗みはなかなか発覚しなかったという自信、それにもまして世間から黙殺されていく自分の才能に関するゆがめられた自尊心が彼の「完全犯罪」への情熱をかりたてたのかもしれない。〝貧しさへの無軌道な挑戦〟と取調べの係官は語り、かつての担任教師は「二重人格」といっている。

（一九五八年九月一日付『毎日新聞』夕刊）

ここにみられるように、マスメディアの反応は、ほとんど犯人「李珍宇」の性格上の特異性と家庭問題に集中している。すなわち、一方では、「二重人格」「秀才の空想家」「貧しさへの反抗心」「欲求不満」「ゆがめられた自尊心」といった犯人の性格の問題に原因を求め、もう一方では、「ノンダクレの父への悲観」「貧しい家庭」「親の愛情の欠如」「問題家庭の少年」などの劣悪な家庭環境の問題に犯行の動機を見出そうとしている。[7] この事件に関する他のマスメディアの論調も、右の『毎日新聞』の記事と大同小異である。このような見方は、社会に反抗した凶悪犯罪の原因を、社会環境と犯罪心理学に求めるといった一般的なメディアの手法とも言えるのかも知れない。

ところで、この事件に関するメディア記事が氾濫したにもかかわらず、犯人が在日朝鮮人であるという特殊な位置とその犯行原因を結びつけて分析しようとする報道記事はほとんど見当たらない点は注意に値するだろう。犯行の動機を「犯人の歪んだ性格」や「家庭環境の劣悪さ」から見ようとする一般犯罪論的な見方は、大衆新聞メディアの性質上いたしか

たのないことであっても、犯人とその家庭が、まさに在日朝鮮人であったところにメディアの視線が届かなかったという事実は、当時はまだ、在日朝鮮人の問題に関する日本人社会の認識度が、それほど高くはなかったことを反映しているともいえる。たとえば、この事件を社会的環境を基にして見ようとする次のような分析記事がある。

「少年工の犯罪ふえる」――悪い職場の環境、警視庁：責任者設置呼びかく

太田芳江さん（一六）殺しの容疑者は同じ小松川高校の定時制に通う少年工員だった。警視庁の話では最近こうした勤労少年の犯罪が激増、しかもそのほとんどが母校の同級生や後輩を〝獲物〟に選んでいるという。父兄や先生の不注意もあるが、原因は職場の不純なふんいきと非人間的な労務管理によることが多いとして、警視庁少年課ではこの事件を機会に、少年の働く都内六千の事業場全部に「補導責任者」を置いて少年工員の指導に力を入れるよう、強く呼びかけることになった。

（一九五八年九月二日付『朝日新聞』夕刊）

ここでは、当時の「悪い職場の環境」による「少年工の犯罪増加」という、環境問題におよぶ一般論的な分析にとどまっている。すなわち、小松川女高生殺し事件の犯人が工員であった事実をふまえて、この事件を「勤労少年の犯罪の激増」「母校の同級生や後輩が被害者」といった社会現象と結びつけ、その上でその原因を「職場の不純な雰囲気」や「非人間的な労務管理」に求めるという認識の回路が明確である。そのためにその対策として、事業場に「補導責任者」を設置するという提案からもわかるように、単なる社会環境の問題として位置づけ解釈しようとしているのである。

しかし、李珍宇とその事件を虚構の物語世界で新たに問題化した『叫び声』では、メディアと知識人たちが問題視していた李珍宇の家庭[8]が、まったく別の角度から捉え直されているところに本稿は注目する。その典型的な例は、李珍宇の育った貧乏な在日朝鮮人の普通の家庭が、「日本人の母」と「朝鮮人の父」という家庭へと変容させられたところにみられる。すなわち、「東京港の埋立地の最も貧しい区画。かれは小さな木工所の宿舎にとまりこんで働いていた」という主人公の境遇は、李珍宇の置かれている現実をある程度まで反映しているとしてもよいが、その一方で「かれ呉鷹男は父親が朝鮮人だったが、かれの母親はそのことを、できるだけ隠しおおすように自分の息子をしつけたのだった」（一九頁）という個所は、事件に新しい意味を付与すべく再構築しようとする作家の意図を示すものといえる。特に、「かれの妻は

日本人で、その妻は一人息子をすっかり日本人として育てるために、その気の毒な老朝鮮人を、家から追いはらってしまった」という呉鷹男のメモや、「息子は朝鮮人でもない、日本人でもない、なんでもないものに育ったのやからねえ、そやから犯罪人にでもなりたかったのんやあ！」という父親の言葉からみる限り、その事件を日本人社会における在日朝鮮人の特殊な立場と結びつけようとする意図が、大江には明確にあったといえよう。

李珍宇事件という実際の事件から、『叫び声』の物語世界におけるプロットへと至るこのようなプロセスを示唆する資料として、次のような大江の発言を取り上げることができる。

大江：本当は、立派な国を持った外国人として尊敬し、外国人としての相手を認める態度を日本人が持つことが、日本人の朝鮮人問題に対する一番いい姿勢だ、朝鮮人も外国人として誇りをもってる、それが今日の現実だ、ということをいってました。（中略）張本さんみたいに、韓国人としての誇りを持ってる方だと、一番スクスクと日本の中で精神的にも肉体的にものびることができる、という意見があります――金達寿さんなんかの考え方もそうでしょう。それとは逆に、日本人に同化しようとしたり、朝鮮人であることを恥じたり、かくそうとしたり、というような形で、子供の時から教育されると、どうしても人間がゆがんで来て、スクスクとのびていけない人間に変わってしまう、ということがあるわけでしょう。[9]

これは、一九六〇、六一年、中国や東欧・西欧・ソヴィエトを旅してから書いた旅行記『世界の若者たち』の中に収録された、プロ野球選手張本勲との対談である。ここには、大江の在日朝鮮人に関する認識がよくあらわれている。大江はここで、在日朝鮮人がみずからを日本人に同化しようとする努力は望ましいものではなく、日本人と異なる朝鮮人という民族の誇りを保つべきだという立場をとっている。このような大江の言説は、張本勲という当時の野球界のスターであった人物の「まあ僕が一番尊敬しているのは、おふくろですよね。いつも僕にそういうことをいったですからね――お前は韓国人であるし、そういうことに胸を張ってなんせよ、と」という言葉と相まっている。そして大江はその認識の延長上に李珍宇の事件を持ち出し、「やはり韓国籍の一八歳の少年が殺人を犯した。この場合は張本選手とは逆に、日本人に近く育てていこうという家庭だったということが、それがこういうことと関係するのじゃないだろうか」と推測するに至っ

ている。この発言は、同じ在日朝鮮人でありながら、生き方の異なった李珍宇と張本勲を比較してその原因を述べているところであるが、『叫び声』における前述のような変容はこうした認識と深く関係している。

しかし、傑出した才能によって日本人社会からも尊敬を集める野球スターと、才能に恵まれず、社会の底辺に生きざるをえない、それも日本人の朝鮮人への差別のまなざしと、そのまなざしの背後に厳然として存在する制度上の差別によって深く心を傷つけられ、屈折した生き方しかできない大多数の在日朝鮮人の生き方とを対比して社会が断罪することに、果たしてどれだけの説得力が感じられようか。メディアにおいて特権化された地位を持つ知識人としての大江が、恵まれた才能によって在日朝鮮人から抜け出した一人の野球スターを眼の前にした発言は、社会の底辺にうごめかざるをえない在日朝鮮人にとっては、まるで無邪気で素朴な理想論としか映らなかったのではなかろうか。

在日朝鮮人が〈民族〉というタームを用いるとき、それは実体概念であることはもちろんだが、それよりもむしろ日本人のまなざしに反抗する関係概念であったと思われる。その残酷な歴史から、いやおうなく日本人社会の中で生きざるをえない在日朝鮮人が日本人の差別に対抗して、人間としての尊厳を守るために〈民族〉をみずからのアイデンティティの拠り所としたのであって、それはまさに日本人との関係性において生きた概念であった。大江が、このような在日朝鮮人の現実を捨象して、異文化社会に住む外国人の問題として李珍宇事件を一般化するとき、その本質は実は覆われてしまったのである。大江がその事件をモデル化して作品『叫び声』を執筆したとき、事件と小説とはすでに断絶していたというべきだろう。もしも韓国人（朝鮮人）を欧米人と置換することができるならば、大江の発言は日本人には納得されたろう。しかし日本人にとって、韓国人と欧米人が置換不可能であった。大江の言う「外国人」はたんなる抽象語にすぎない。大江には日本人社会における在日朝鮮人という近代日本と朝鮮の歴史的交渉の特殊性に規定された問題はすでに捨象されている。したがってこの作品の主人公を朝鮮人の父と日本人の母の間に生まれた在日朝鮮人と設定し直されたとき、すでに作品は大江一流の主題へと還元されてしまう危険性を孕んでいたのではなかろうか。

三　「呉鷹男」と「虎」への視線 ―― 野獣と怪物 ――

作家大江は、「李珍宇」という実在人物が犯した殺人事件を、当時の言論界の見方とは異なり、日本における在日朝鮮

人の問題として追究しようとした。そのため、朝鮮人の父と日本人の母の設定など、「呉鷹男」はモデルの「李珍宇」から様々なかたちで変容・逸脱した人物として設定された。大江は、その殺人事件をきっかけに、在日朝鮮人へ目を配るという意図をもとうとしていたことは確かである。その目的のために、変容された「呉鷹男」は実際この作品世界の中でどのように造型されているのだろうか。

この作品には、「呉鷹男」という人物だけでなく、「虎」も、「呉鷹男」と同様の状況に置かれている人物として登場している。すなわち、一人はアメリカ系黒人と日本人、もう一人は朝鮮人と日本人の間に生まれた混血児であるということ、したがって彼らは、日本でない別個の土地に自分の起源を求めているということがあらかじめ設定されている。そして彼らは新たな土地を求める過程で、どちらも暴力や殺人事件を起こし死に至る。この節では、「呉鷹男」の人物像を「虎」の人物像と対照することで、この作品において在日朝鮮人像の表象が彼の引き起こす殺人事件とどのように結びつけられているのかを考察する。

「虎」の場合、死に至る次のような場面で、彼の人物像がもっともよくわかる。

「虎は、魔法の力で横須賀をアフリカの土地に変えたみたいだったんだよ、本当の虎みたいに猛だけしく怒り狂って合成樹脂の自動小銃をかまえて、まぼろしの象にむかってゆき、うち倒されたみたいだったんだよ。おれは羨ましがっていたぜ」と呉鷹男はいった。

（八一頁）

後で詳しく論じることになるが、「呉鷹男」と「虎」が、それぞれ事件を起こす場面では、この作品の視点人物であり、出来事の語り手である「僕」は、小説空間から消えてしまう。そのために、「虎」や「呉鷹男」の行為は、「呉鷹男」によって語られ、彼は自らの視点で、「虎」を語ることになり、また後には自分自身の人間像を語ることとなる。右の場面は、「セルベゾフ」が少年誘拐事件を起こし国外へ追放された後、「虎」と「呉鷹男」が、国外脱出のために「友人の号」の資金をかせごうとして、横須賀基地で銀行強盗を計画するところである。その実行過程で、「虎」は、米兵を挑発し、彼らの銃で打ち倒されてしまう。その瞬間、「呉鷹男」が感じたことを、叙述したものである。「呉鷹男」によって語られる「虎」は、そのあだ名が付けられた時の意味であった混血児を象徴する、二色の縞のイメージだけを意味してはいない。

それは「猛だけしい」という勇敢な戦士の姿、それもアフリカの密林の「怒り狂って」いる猛獣そのものの姿を表している。

「虎」は、それまで「アフリカ」といった「本来の土地」への回帰を執拗に求め続けてきたが、その「アフリカ」行きが不可能になった時、日本でその「アフリカ」を創り出そうとする。注目すべきことは、大江にとって人種（民族）とは実体概念であって、その表象が人間と土地の結びつきに求められているということである。一九六〇年代は、アフリカ諸国が、フランス・イギリスなどの植民地支配から独立している時期であり、この物語で「アフリカ」が登場していることは、この事実と無縁ではない。大江はこれについて積極的に発言している。[10]「虎」が演出する「アフリカ」は、動物的で野生的な姿であると、「呉鷹男」は語る。だが、「虎」の「野獣性」が表れるところはこの場面だけではない。「虎」は、四人の共同生活に入る前、人種差別的な事件を経験し、そこから「アフリカ」を目指すこととなった。そのような彼の、都市に生きる行為は、次のように書かれている。

> かれはもう二度と、コンクリートの砂漠にほうりだされて夜明けをむかえるような失敗はしなかった。かれはいま、猛虎の行動法にしたがって、コンクリートとネオンと排気ガスのジャングルを生きているのだった。（三三頁）

「虎」は、「コンクリート」や「ネオン」や「排気ガス」が代表する都市文明の中で、一人で「アフリカ」を演出し、「猛虎の行動法」という言葉が表わしているように、都市文明とは相反する密林の野獣のような人物として表象される。そのためか、「セルベゾフ」の事件を取材しにきた、悪質の「記者」に暴力をふるったりするが、これはまさに、「アフリカ」の野獣性が、「虎」という混血児を通して表象されているのである。

人種（民族）性が固有の土地と結びつけられて概念化されるとき、大江にとって「虎」はアフリカの野性を体現する人物であった。野生は「虎」のアイデンティティであったといってもよかろう。本来野性は暴力とは無縁な概念であるはずだ。しかし日本人社会が彼を受け入れようとしないとき、野生は容易に暴力に結びつく。野生が野獣性に変わるのだ。「虎」の人種的自己主張（アイデンティティ）は、日本人社会への反撃としてしか、実現できなかった。大江はそう考えたのではなかろうか。しかもそのことを在日朝鮮人「呉鷹男」に語らせることは重要である。

一方、自分の根拠地（「本来の土地」）を掴めないまま彷徨するもう一人の混血児「呉鷹男」が、その彷徨の末に犯してしまった強姦殺人のプロセスは、一言でいえば、自分自身の「怪物性」を証明するためのものであった。それが在日朝鮮人の問題なのか、現代世界の人間存在の孤独あるいは実存の問題なのかを読み解く上で重要な個所なので、長文だが引用してみよう。

おれはおれ自身がこの現実世界に拒まれている私生児だと感じていながら、しかもこの世界になんとかはいりこんで嫡出子の安心感をあじわおうと悪戦苦闘してきた、それがまちがいがわかるまでおれは、小さな和船にのって漂流したり、また、外国旅行の計画にたよってみたりしたんだよ、もちろん、みな失敗だったさ。しかしいま、おれは、この現実世界で居心地よく生きている他人どもの任意のひとりをしめ殺してやったんだ、そしておれのなかにおれひとりの王国、おれひとりの世界の存在をたしかめたんだ。あなたにも、いまやおれのauthentiqueな現実生活があなたがたの現実世界では安全には生きられない人間だということをしめすために、あなたがたのひとりを、心をこめて殺したところなんだから。おれこそ自分自身の巣へもどりたくて暴れているニューヨオクのキング・コングのように優しくて真剣な怪物なんだよ、自分の現実のauthentiqueな感覚をさがしもとめている、怪物なんだよ。（九八頁）

「呉鷹男」は現実世界で「authentique」な感覚しか求められない浮遊する存在だという自己認識から、その反動として殺人という行為は、実は、社会に何かしら関わろうとするための衝動的な倒錯行為だった、そう大江には認識されている。この個所は、作家大江が、物語全体をとおして「小松川事件」をめぐり、一種の解釈を施したところだといえる。だがその解釈とは、在日朝鮮人「呉鷹男」が「私生児のような感覚」であったため、現実世界で「居心地よく生き」ている人間を破壊し、自分の世界を確保しようとする「怪物」になるしかなかったプロセスとして提示されている。

このような主人公の狂気に至る心理過程は、当時新しい学術上の理論として受容された構造主義の〈中心〉と〈周縁〉の概念にのっとっていることはいうまでもあるまい。〈中心〉の人間世界を〈周縁〉の異界・他界の霊的存在（「怪物」もその一つ）が侵犯するというものである。ただ大江はその理論的枠組みに疎外の概念を挿入したのであろう。本稿が問題

としたいのは、在日朝鮮人が〈周縁〉の異界存在に定位されているという大江の認識、あるいは無意識である。民族概念を規定する関係論を捉えようとしたのだろうが、関係論の基本は対等な相関関係性にあることが捨象されているのではなかろうか。そこにいやおうなく入り込むのは、戦前の民族意識をひきずる優劣という価値観念がほの見える。

「呉鷹男」は、もとから「怪物がすきなのだ、そして怪物的かそうでないかということで人間を判断する基準をつくっていた」（二七頁）とか、「呉鷹男は半・朝鮮人の青年の自伝を、《怪物》となづけようとしていた」（二七頁）といった叙述からみられるように、在日朝鮮人としての「呉鷹男」には、「怪物」という自己規定が下されている。だとすれば、「怪物」好きの「呉鷹男」が、「小さな不満家」の役割から日常生活を破壊する恐怖の「怪物」へ転換する際、実際に、どのような「怪物」として描かれることになるのか。これは「ニューヨオクのキング・コング」という言葉が示唆している。「ニューヨオク」という文明社会と「キング・コング」のような野蛮な存在とは、あまりにも相反している。つまり、「呉鷹男」は、いわゆる日本社会における完全なる他者的存在とされているのだ。それも実存主義の〈他者〉ではない。自己閉鎖する特殊な日本人社会にとって脅威の存在としての他者的存在という認識である。映画『キング・コング』（一九三三）が、「植民地的他者の征服」[1]の表象であるなら、それは「呉鷹男」の表象にも当てはまる。「キング・コング」が、アフリカのゴリラから派生している怪物であるため、ニューヨオク／キング・コング、文明／野蛮といった対立が「呉鷹男」を介して表象されているのである。

この作品は「僕」が作品世界を語ってゆく形式をとっている。だが、この物語世界のモデルとなっていた小松川の女高生殺し事件や賄い婦殺し事件を描いた四章にいたると、語り手「僕」が結核のゆえサナトリウムに入ることとなって物語世界から急に消えてしまうことは興味深い。四章は大江が李珍宇事件を在日朝鮮人の問題として解釈しようとした創作意図が読みとれる章であることは先述したとおりだが、この出来事だけはその当事者である朝鮮人「呉鷹男」自身の言葉によって語られているのだ。そこで「呉鷹男」の描く自画像は「怪物」や「キング・コング」や「私生児」という用語が見せるように、負の自己規定そのものであった。

二人の混血児「虎」と「呉鷹男」の人物像はどちらも、まず日本社会の定位があって、その社会を侵犯する周縁的な存在として描かれているが、「小松川事件」は「呉鷹男」自らが「怪物」としての自己像を規定することによって始めて成り立つという意味で、在日朝鮮人の造型における限界がみえるといえよう。すなわち、「虎」はその〈野獣性〉が見せる

ように、「アフリカ」という土地と密接に噛み合った実体性のある人物として造型されている。これとは対照的に、「呉鷹男」は人工的に造られた「怪物性」を表し、その実体が朝鮮という土地とは結びつけられない曖昧さを示しているという事実は、まさに在日朝鮮人の表象における大江の限界を見せるところだといえよう。大江が在日朝鮮人の存在を表象する際、その実体を掴めなかったため在日朝鮮人「呉鷹男」を空想的な「怪物」として描いてしまったといえる。

四　作家の創作プロセスと朝鮮人の表象

この物語世界の特徴は、登場人物が、様々な人種の人間によって構成されているということだ。たとえば、ふたりの混血児「虎」と「呉鷹男」、そしてブルガリアから移住したスラヴ系のアメリカ人「セルベゾフ」、この三人による出来事を語っている日本人「僕」といった登場人物がそれである。先行研究は、この四人すべてを作品中の用語を借りて「authentique」（正統的な、本物に間違いない）でない感覚を抱えている人物[12]と規定している。この登場人物すべてが、日常的な普通の生活から逸脱しているという点では、そのようにいえるかもしれないが、実際、それぞれの人物の意識や行為を細かく吟味すると、その人物同士にも大きな差異がみられる。特に、この物語でオータンティックでないという否定的なイメージを与える言葉づかいは、すべてが「呉鷹男」の意識を描くために使われているという事実を考えるならば、それは在日朝鮮人「呉鷹男」の人物造型と密接に関わっている用語だといえよう。これは、「呉鷹男」が「この世界の正規の人間じゃない」とか、「この世界にぴったりして生きているという実感がない」とか、「別の異質の人間」だといった感覚、いい換えればアイデンティティの欠如に起因する感覚を披瀝する言葉である。

この作品では、もう一人の混血児「虎」も、同様の状況に置かれている。しかし、「虎」の場合、「アフリカ」という自分の「本来の土地」を強く指向しており、「呉鷹男」は、「自分のこの世界とはちがう世界」とか「どこか他の世界」というように自発的な方向性を持っていない。「虎」は、次のように描かれている。

①虎は僕らが誇りに思っていたほど美しかった（二五頁）

②固定観念のように、基本的な優しさをすてないのが虎の美徳だった（五一頁）

③虎は僕らのなかで最も美しい顔と声、純金の心をもった男だった（七九頁）

「美しさ」や「優しさ」や「純金の心」などの言葉が示すように、彼は肯定的なイメージで捉えられている。それだけでなく、「虎」は、世界一周という四人の計画にも最も一生懸命だったり、最も他人への思いやりがあったり、いずれも肯定的なイメージで彼は表象されている。同じ混血児である「虎」は、いつもオータンティックでないという感覚をもっている「呉鷹男」とは、異なる存在だと指摘できる。特に、混血児をめぐる問題意識は、「虎」の場合、内発的であったが、「呉鷹男」の場合は、そこから影響された他動的なものであった。

では、物語世界で、「呉鷹男」をはじめとする朝鮮人像は、どのように描かれているのだろうか。それは、一言でいえば、負のイメージである。たとえば、主人公「呉鷹男」は、「懐疑的な様子」、「反逆的な態度」、四人の共同生活を離脱したとか、負のイメージで造型されている。それは、他の朝鮮人の表象においても変わりはない。「虎」と「呉鷹男」の悲劇的な事件のきっかけが、朝鮮人による詐欺事件であったということは、この作品での人物造型と同一であるといえよう。また、「呉鷹男」の父の場合は、次のように造型されている。

新聞には顎髭をながくのばした小さな老人が鼠のような眼をして、ニンニクをかじっている写真がのっていた。いま、老人は、なかば仙人となって、ニンニクだけを食べながら放浪しているのだった、北海道の原野を、つむじ風にくるくる舞いながら、ひたすら仙人にかわるために。その談話記事によれば老人は仙人になるべき人間だけに、きわめて哲学的な態度をもっており、あらゆる問題に妥当な答をひとつずつ用意して、なおも思考をつづけているという印象だった。（中略）老人は、まさに哲学的モラリストの態度でもって、簡明にこたえていた。（一〇二頁）

彼は、日本人として息子を育てようとする妻に追いだされて、「乾燥野菜のような顎髭をはやし、朝鮮風のズボンと登山靴をはい」（一七頁）た、まさに朝鮮の伝統的な容貌で日本の全国を放浪している在日朝鮮人を演じている。彼は、日本で朝鮮の代表的な食物として知られている「ニンニク」だけを食べるとか、「哲学的モラリストの態度」をもった「仙人」になろうとするとか、いずれも朝鮮のステレオタイプ的なイメージを負わされた在日朝鮮人として捉えられている。

だが、ここで注目すべきことは、この朝鮮的なイメージが日本の現実からひき離されて、現実を超越する放浪生活と結びつけられているということである。「呉鷹男」の父親は、「呉鷹男」が抵抗してきた日本社会における「流浪生活の小さな不満家」を演じているにすぎないのである。特に「呉鷹男」の父親像が「仙人」という実際存在していない観念的な存在として描かれていることは、「呉鷹男」が「怪物性」として表象され、実体性が捨象されていることとあいまっているといえる。当時の時代性によると考えられるが、在日朝鮮人「呉鷹男」の家族が、突然、新たな根拠地「北朝鮮」を求めて日本から離れるという締め括りも、この解釈とは無関係ではないであろう。

一方、大江は、小松川事件をどう認識していたのであろうか。これは、当時、大岡昇平や金達寿や秋山俊や木下順二のような作家たちによる問題提起と無関係ではない。彼らは、いずれも、この事件を在日朝鮮人の問題といった姿勢から、文芸誌でそれぞれ意見を述べている。

> 李君の犯罪は在日朝鮮人の運命の一つの縮図と申せましょう。父親は大正初期に日本に渡り以後十年間その日その日の生活に追われて各地を転々とし、貧しい不安定な暮らしをつづけてきました。善人ですが子供を指導する能力は足りません。母親は唖に近い人間です。この両親の間に六人の子が生れた。李君は第二番目の子です。この家族は貧しい上に朝鮮人という特殊のものです。かつて同胞と呼ばれた人々が実に著しい差別的空気のなかにおかれていたことは、御承知のことと思います。李君は日本で生まれ、日本で育ち、日本語しか話せぬ少年でしたが朝鮮人であることを嫌ったようです。これは実に不幸なことです。朝鮮人としての自覚、自身を持ち得ないものが、朝鮮人に対する差別的空気のなかにおかれた場合、正常な成長は著しく困難であり、ゆがんだ人間になるおそれが多分にあります。[13]

この引用は、金達寿が「小松川事件」について書いたエッセイの一部分であるが、新聞の言論が「貧しい家庭」にこの事件の原因を求めているのとは異なり、「差別的空気の中」に置かれている「特殊な朝鮮人」の視点から理解すべきだというのである。このような現象と連動するかたちで、いわゆる「文化人」と通称された一群の知識人と大学生が中心となり、一九六〇年八月に「李少年をたすける会」がつくられる。その中心メンバーは、大岡昇平、木下順二、三宅艶子、渡辺一夫、旗田都立大教授、東大・都立大の学生たちであった。「李少年をたすける会」におけるこの事件に関するスタン

スも、当時の新聞やマスコミがとっていた見解とは異なっていて、その事件が、当時人口数六十万で、在留外国人の十分の九を占めていた[14]在日朝鮮人の問題として扱われるべきだというスローガンを掲げている。

大江は、李珍宇事件をめぐるこのような雰囲気の中で、それに答えるように彼をモデルとした作品を書き上げた。だとすれば、大江は果たして李少年と『叫び声』についてどのように認識していったのだろうか。まず、大江の『叫び声』を書いた意図は、自己欺瞞の意識にとらわれている人物を描くことであった。

> 『叫び声』という小説はもともと、単にひとりの強姦殺人者の青年の肖像を描くためのものだった。ぼくは、父親が朝鮮人であり母親が日本人である、ひとりの憂鬱な青年のイメージを持っていた。かれは日本人として教育をうけることで、朝鮮人としての血と意識から疎外されているし、その疎外の認識が、かれを日本人としてまた疎外している。かれは二重の自己欺瞞のうちに生きている。かれは強姦殺人をつうじて、またその後の新聞社や警察への挑戦をつうじて、正統的な自分自身にいたろうとする。これがぼくの、最初の計画だった。[15]

この引用文からわかるように、李珍宇をモデルとした『叫び声』の登場人物「呉鷹男」は、「二重の自己欺瞞」の中で生きている存在、朝鮮人の中でも日本人の中でも疎外意識を持っている存在、それで「正統的な自分自身」をさがし求めたあげく、殺人事件を起こしてしまった人物として意図されたといえる。この創作意図をみるかぎり、確かに大江には、「実存」の問題や「自己欺瞞」の問題として李少年を「呉鷹男」へと再構築しようとするねらいがあった。

しかし、物語世界をとおして、大江の再構築した「呉鷹男」という在日朝鮮人像は、その在日朝鮮人の持つ特殊性の解釈の試みという意図とは裏腹に、ただの「怪物」にすぎなかった。『叫び声』の創作から六年経て、大江はその限界をみずから認めている。

> 確かに李少年の問題は、政治的にも日本人のモラルティーの側面からも、在日朝鮮人の問題としての特殊性を強調しつつとらえねばならないであろう。しかしそれをこえ人間一般の実存の根本に深くはいりこんで李少年の問題をとらえる視点からは、李少年はわれわれ自身であるか、あるいは、われわれにとって李少年の提出した「警察」と「新

聞」の実体は幻にすぎず、李少年自身がわれわれにとって実在しないか、のどちらかなのである。[16]

一九六八年に書かれたこの引用文をみると、大江は、相変わらず「李少年」の問題を「在日朝鮮人」の持つ「特殊性」としてみるべきだというスタンスではあるが、実際には、在日朝鮮人という特殊性を切り捨て、「人間一般の実存」という視点を強調しているのだ。つまり、この文脈では、「李少年」の問題を「在日朝鮮人」という人種的な視線からみようとした『叫び声』の創作意図が、一挙に取り消されているといえよう。特に、次の発言を考えると、そういえるのである。

李少年が殺人者であること、貧しい在日朝鮮人たることは（そうした具体性こそがもっとも重要なものであることは認めた上で）、われわれの認識の表面からいったん消去されてもなお、われわれへの李少年事件の喚起力は残るのである。すなわち右に述べたような根源的な意味において、李少年の事件は、われわれすべての人間の現実世界でのありようの根本に関わる事件であり、李少年を絞首した綱は本来われわれのすべてを絞首しうる綱なのである。[17]

ここには、「李少年」の問題は、「在日朝鮮人」としてよりも、そこから一歩離れた人間普遍の問題としてみようとする大江の姿勢が読み取れる。この言説は、作品『叫び声』と照らし合わせて考えてみると、物語世界における「呉鷹男」を在日朝鮮人の特殊性から造型しようとした問題設定の限界の裏返しだといえよう。したがって、その特殊性が曖昧となった実存的な人物、在日朝鮮人李珍宇は、結果的に、「怪物」といった人物に造型されるしかなかったのだ。そのためか、大江がこの発言の一年前に書いた『万延元年フットボール』には、『叫び声』の「呉鷹男」という在日朝鮮人とは対照的に、村の経済力を掌握し「スーパー・マーケットの天皇」とまでされて日本人を支配する朝鮮人像があらためて再構築されている。

五　結び

以上、論じたように、「呉鷹男」は、彼をみて叙述してきた「僕」が消えた四章の場面で、「ニューヨオクのキング・コ

ングのような怪物」「私生児」という自画像をみずから作り上げ、「殺人」事件を起こす。このように李少年をモデル化した「呉鷹男」の造型や、その他の朝鮮人像は、「在日朝鮮人の特殊性」の解釈という大江の意図とは異なっている。すなわち、その殺人事件と切り離してみると、「呉鷹男」はむしろもとから「不満」に満ちた「懐疑的」あるいは「反逆的な態度」の「放浪者」にすぎない人物である。そして、自己の内部からでなく、他動的に与えられた混血児としての問題意識も、その生まれつきの「怪物」好きの気質による「怪物」という演技によってしか解決できないように造型されている。したがって、この在日朝鮮人像には、もう一つの歪んだ人間像が秘められているといえよう。

「小松川事件」は在日朝鮮人少年が犯人であるという理由で、当時言論界や文化界に多大な関心を引き起こし、当然当時の知識人の一人である大江もこの余波の中で『叫び声』を書き上げ、その上に「小松川事件」に関するみずからの意見を述べている。しかし、彼が述べている在日朝鮮人に関する言説にしろ、作品『叫び声』における「呉鷹男」の造型にしろ、どちらも在日朝鮮人に関する認識の限界を露呈しているといえよう。

註

本稿に引用したテキストは、『大江健三郎全作品　第五巻』(新潮社、一九七〇年）による。『叫び声』からの引用は、頁数のみを付すことにする。

(1) 「創作合評・高見順・平野謙・北原武夫（『叫び声』論）」、『群像』、一九六二年一二月号。
(2) 堀田善衛、「『叫び声』論――閉塞された時代の声」、『朝日ジャーナル』、一九六三年三月三日。
(3) 中村泰行『大江健三郎――文学の軌跡』、新日本出版社、一九九二年。
(4) 秋山俊「大江健三郎論」、『国文学特集――江藤淳と大江健三郎』、一九七一年一月号。
(5) 石原千秋「『叫び声』『個人的な体験』――反転する帝国」、『国文学特集――いま大江健三郎の小説を読む』、一九九七年二月臨時増刊号。
(6) 李珍宇事件は朝鮮人問題、少年法問題、死刑是否問題などの話題を起こし、それに実存の問題などとからんで注目を惹きつけ、小説、戯曲、映画などの素材となった。
(7) 『毎日新聞』一九五八年九月一日付夕刊。
(8) 上掲新聞で望月衛氏（千葉大教授）は事件の背景を「問題家庭の少年」といった観点から分析している。
(9) 大江健三郎『世界の若者たち』、新潮社、一九六二年、一五七～一五九頁。

(10) 大江健三郎は「甦る黒いアフリカ」(『婦人公論』、一九六一年七月号)というタイトルで「奴隷貿易に始まる屈辱と圧制の鎖を断ち、新生の苦痛と闘うアフリカ黒人の真実の顔」という内容のエッセイを書いている。

(11) 宮本陽一郎「キング・コングのニューヨーク――帝国主義・博物館・プリミティヴィズム」、山形和美編『差異と同一化――ポストコロニアル文学論』、研究社、一九九七年。

(12) 石原千秋氏の場合は、この四人の人物を「性的にあるいは人種的に差別される側の人間」や「不能者、失敗者」と見なしている。

(13) 金達寿「「小松川事件」の内と外」、『新日本文学』、一九六一年一月創刊号、一七三～一七四頁。

(14) リチャード・H・ミッチェル著・金容権訳『在日朝鮮人の歴史』、彩流社、一九八一年、一五二頁参照。

(15) 大江健三郎「困難の感覚ということ」、『厳粛な綱渡り』、講談社、一九九一年、二六四頁(初出誌と初出年は『文学』、一九六三年一一号)。

(16) 大江健三郎「政治的想像力と殺人者の想像力」、『大江健三郎同時代論集3』、岩波書店、一九八一年、一六九頁(初出誌と初出年は『群像』、一九六八年四月号)。

(17) 上掲論文、一七一頁。